発掘！　水戸城大手門

1　水戸城大手門とは？

水戸城大手門は、江戸時代、大手橋の東側に建っていた、二階建ての城門です。「大手」とは、お城の正面という意味ですから、大手門は、水戸城の顔ともいうべき、最も大切な門でした。

江戸時代の大手門

2　なぜ発掘調査をするの？

現在、水戸市では、大手門の復元を計画しています。復元とは、江戸時代に建っていた大手門の姿をそのまま再現することです。復元のためには、古い写真や絵図はもちろん、発掘調査で当時の大手門の工事の跡を確認するなど、多くのデータを集めなければなりません。今回の発掘調査も、こうしたデータを得るために、今年７月から３か月間、調査をしました。

発掘調査のようす

3　発掘のポイント

今回の発掘調査では、たくさんの発見がありました。そのなかでも重要なポイントが、次の３つです。

瓦塀

ポイント１　瓦塀の発見

調査の一つ目のポイントは、水戸城を囲む土塁の中から、「瓦塀」と呼ばれる、土と瓦を交互に重ねてつくりあげた土塀が見つかったことです。今から約300年前につくられたと考えられています。

【日本最大級の大きさ】

注目したいのは、その大きさです。高さは約2.7メートル以上、幅は約2.4メートルもあります。

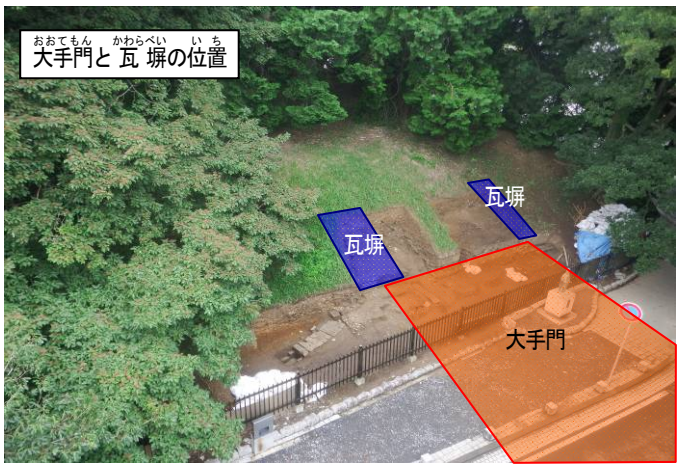
これをほかの場所の瓦塀と比べてみましょう。日本で有名な瓦塀として、織田信長がつくったといわれる、愛知県熱田神宮の「信長塀」があります（日本三大土塀の一つ）。信長塀の大きさは、高さ約２メートル、幅は約0.8メートルほどです。大手門の瓦塀は、信長塀より高さが0.7メートル高く、幅も1.9メートル厚いことになります。これだけの大きさの瓦塀は全国的にも珍しく、日本最大級の瓦塀といえます。

熱田神宮の瓦塀（信長塀）

【瓦塀は４か所ある】

今回の発掘調査では、瓦塀は２か所で発見されました。具体的には、大手門が建っていた場所の、前と後ろに１か所ずつです。今回は、水戸二中側しか発掘していませんが、茨城大学附属小

側の土塁にも、同じような瓦塀がある可能性が高いと考えられています。つまり、瓦塀は、大手門を取り囲むように、４か所あったものと考えられています。



大手門と瓦塀の位置

【細かなデザイン】

発掘された瓦塀をよく見ると、丸い瓦や、平たい瓦、弧の字の瓦など、いろいろな瓦が並べられていることがわかります。異なる種類の瓦を並べて、瓦塀全体に細かい模様をつくりだしていたのです。

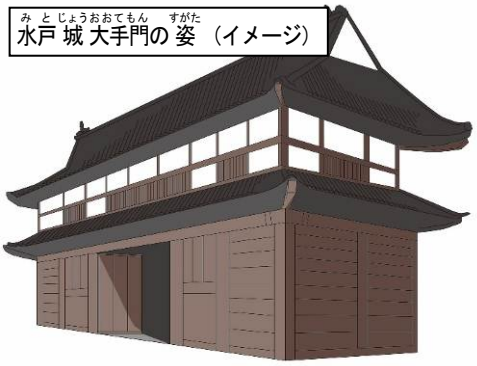
こうした細かいデザインを描くことにより、天下の副将軍・水戸徳川家のお城の正面玄関にふさわしい雰囲気をつくりだしていたものと考えられます。

瓦塀のデザイン（拡大）

ポイント２　大手門の位置と大きさが確定

調査の二つ目のポイントは、大手門の位置と大きさが確定したことです。大手門は、今回発見された二つの瓦塀の中間にあることがわかりました。

また、その大きさも、高さ約15 メートル、幅約16.5 メートル、奥行約5.5 メートルであることがわかりました。


水戸城大手門の姿（イメージ）

ポイント３　さまざまな出土品

調査の三つ目のポイントは、土塁の中から、大手門に使われたとみられる釘や鍵のほか、いろいろな模様の瓦が大量に発見されたことです。その数は数千点にのぼります。

徳川家といえば三つ葉葵紋が有名ですが、瓦には三つ葉葵のほかにも、太鼓の模様によく使用される「巴紋」といわれる模様の瓦も見つかっています。三つ葉葵紋は大手門などの重要な建物に使用され、巴紋は塀などの建物に使用されるなど、使い分けられていたものと考えられます。

大手門の番所に使われていたと考えられる鍵

４　発掘調査をもとに、大手門復元へ

今回の調査で、大手門の位置や大きさはもちろん、瓦塀などの大手門周辺の建物、そして大手門に使用されていた瓦や釘などが発見されました。

こうした発見は、大手門復元に向けてたいへん役立つものばかりです。

水戸市では、今回の発掘調査をもとに、水戸城の大手門の復元を進めていきます。ぜひ楽しみにしていて下さい。

三つ葉葵紋瓦